

# 社会科学におけるモータースポーツ研究の動向と課題 ——公道レース・マン島TT研究のための視座——

社会学研究科社会学専攻博士後期課程3年

小林 ゆき

## 論文要旨

本研究は、オートバイの公道レース、マン島TT (Tourist Trophy) レースと地域社会との相互関係を研究する上で、社会科学分野においてこれまでどのようにモータースポーツが研究されてきたのか、先行研究における議論を検討することを目的とする。モータースポーツはその特徴から、テクノロジーの発展との相互影響やスポーツ・ツーリズム化など様々な側面をはらみながら発展してきた。しかし、社会科学分野における研究の蓄積は十分ではない。そこで本稿ではまずモータースポーツの単語の初出と各種の定義を整理し、次に社会科学におけるモータースポーツ研究の位置付けを検討する。さらに、モータースポーツ研究の動向を整理した上で、TTに関する先行研究を概観しつつ、モータースポーツ研究における課題について検討する。その結果、既存研究の多くは「みるスポーツ」としてのモータースポーツに焦点が当てられてきたことがわかった。今後の課題として、多角的な視点、とくに「ささえる」視点を取り入れることで、研究の可能性を広げられるのではないかと考えられる。

## キーワード

モータースポーツ、マン島 TTレース、スポーツ・ツーリズム、ささえるスポーツ、スポーツ・ボランティア

## 目次

### はじめに

1. 「モータースポーツ」とはなにか
  - 1-1 Motor Sportという単語の初出
  - 1-2 モータースポーツの定義
  - 1-3 モータースポーツ統括団体による定義
2. 近代スポーツ研究におけるモータースポーツ研究
  - 2-1 社会学におけるスポーツ研究
  - 2-2 スポーツ社会学におけるモータースポーツ研究
    - 青少年特有の活動と結び付けられたモータースポーツ
    - モータースポーツのスポーツ性に対する懐疑
    - みるスポーツとしてのモータースポーツ
3. モータースポーツ研究の動向
  - 3-1 モータースポーツ研究史概観
  - 3-2 モータースポーツ史からみる近代産業革命と社会の相互関係
  - 3-3 社会問題としてのモータースポーツ研究
  - 3-4 モータースポーツに関するナラティブ分析の一例
4. マン島TTレースに関する先行研究
  - 4-1 社会資源としてのモータースポーツ
  - 4-2 地域アイデンティティ化したモータースポーツ
  - 4-3 観光資源としてのモータースポーツ
  - 4-4 ツーリストの「まなざし」とモータースポーツ

### おわりに——モータースポーツ研究の課題と展望

### はじめに

本研究は、マン島 (Isle of Man)<sup>1</sup>で100年以上続いている、公道を使うオートバイのモータースポーツ (motorsport<sup>2</sup>)「マン島TTレース (Tourist Trophy Races、略称TT)」と地域社会との相互関係を研究する上で、社会科学分野において、これまでどのようにモータースポーツが研究されてきたのか、先行研究における議論を検討することを目的とする。

TTを研究する上で注目すべき点は、現代では原始的方法とも言える公道レースとして形式を保ちつつ、地域社会に密着しながら発展してきた点である。スポーツは、スポーツ文化の多様化にともない「するスポーツ」や「みるスポーツ」とともに「ささえるスポーツ」<sup>3</sup>と分類されるスポーツ・ボランティア活動が注目されているとされる [山口 2004: 3]。モータースポーツはその特質から「みるスポーツ」の視角で着目されることが多いが、TTが長

く続いてきた背景には、地域住民が主体的に「ささえるスポーツ」としてTTに関わってきた点があることに着目したい。そこで本稿ではそれらの点を踏まえ、先行研究においてモータースポーツやTTがどのような視角で論じられてきたのかを探ることとする。

さて、「モータースポーツ」と呼ばれるスポーツのカテゴリーは、19世紀後半、内燃機関を積んだ四輪車やオートバイが市販化される前後に、ヨーロッパやアメリカで発祥したとされる。モータースポーツを取り巻く状況は20世紀に入って以降、モータリゼーションの発展とともに、文明的テクノロジーを使うというその特徴から、さまざまな側面をはらみながら発展してきた。

一般的なスポーツ<sup>4</sup>とモータースポーツが大きく異なる点は、モータースポーツは競技者の身体的能力や運転技術（テクニク）を競うだけでなく、道具としての乗物そのものの性能（テクノロジー）向上と試験の場としての側面があることである。レース結果の報道は、性能の高さを実証した結果として宣伝価値を帯び、モータースポーツの黎明期にはすでに「新聞が特集するレースの宣伝価値に気づかないメーカーの人間はいなかった」[ベッツ（Bett）1988：430]という。競技結果を利用した自動車やオートバイ製品そのものの販売促進や、レースを利用した様々な商品の販売促進活動の側面を、アルフォード（Alford）とフェリス（Ferriss）は、モータースポーツが「無料の”広告を兼ねる”スポーツであると示唆した [Alford and Ferris 2007：33]。モータースポーツの商業化は1980年代以降、テレビメディアの発達を背景に、メガ・スポーツ化とグローバル化が進むとともに、相乗してメディア・スポーツ化も顕著である。

モータースポーツの経済的影響は自動車産業のみならず、地域社会や「モータースポーツ産業」そのものに対しても発生する。経済的影響が大きくなると、開催地の地域社会における政治的な側面も動きも大きくなる。

モータースポーツの特色は、次の2点が挙げられる。第一に、モータースポーツは参戦費用やリスクの面から誰もが簡単に参加できるスポーツではないため、「(参加)するスポーツ<sup>5</sup>」としての側面より、「みるスポーツ（スペクテイター・スポーツ）」としての側面が強い点である。常設サーキットの場合、開催地は一般的に市街地から離れていることが多いため<sup>6</sup>、観戦には長距離の移動や宿泊を伴うことが多い。このため、経済効果を狙って積極的に常設サーキット建設や、それに伴うメガ・スポーツイベントを誘致する自治体もある<sup>7</sup>。

第二に、見る側にとって、レースのイメージを反映させた自動車やオートバイを所有したり、その所有車で観戦しに行ったりする行為そのものが、スポーツ・ツーリズムとしてのモータースポーツ観戦に欠かせない行動となっている点である。

しかし、モータースポーツは騒音や交通渋滞、交通事故などの社会問題が発生しやすいことも特異性として挙げられる。競技そのものが発する騒音だけでなく、メガ・スポーツ化に伴い大勢の観客が乗り物でイベントに押し寄せ、一部は疑似体験的にモータースポーツ開催

地域周辺を自動車やオートバイで走り回る結果、騒音や交通事故などの社会問題が起こる。

以上のように、モータースポーツが持つ特異性は、テクノロジーの発展、スポーツの商業化やメディア・スポーツ化、スポーツ・ツーリズムとしての発展が挙げられる。その結果モータースポーツはスピードとリスク、商業化とプロフェッショナルスポーツ化、騒音や渋滞、交通安全などの問題をはらみ、それらは開催地域の経済問題、政治問題にも発展しうる。さらには近年、地球温暖化問題からモータースポーツと自然環境破壊についての問題も開催における課題となっている。それにも関わらず、スポーツ研究においてモータースポーツ研究の蓄積は十分とはいえない。

そこで本稿では、第1章で「モータースポーツとはなにか」を単語の初出と各種の定義から整理した上、第2章では社会科学におけるモータースポーツ研究の位置付けを考察し、第3章ではモータースポーツ研究の動向を整理、第4章ではマン島TTレースに関する先行研究を概観しつつ、モータースポーツ研究における課題を明らかにすることを目的とする。とくに、モータースポーツイベントの変容過程や、地域住民への生活への影響や経済的影響など地域社会との相互関係に着目し、これまでの研究はどれだけそれらの課題に迫っているのか検討していく。

## 1. 「モータースポーツ」とはなにか

本章では、一般的な近代スポーツとモータースポーツとの違いについて明らかにするため、第一にモータースポーツの出現を述べ、第二にモータースポーツの定義を整理し、第三にモータースポーツ統括団体による定義を示しておく。

### 1-1 Motor Sportという単語の初出

モータースポーツが出現したのは、科学技術の発展により動力源を積んだ乗り物が発明されるとともに、その検証として着順を競ったり、最高速度や平均時速、走行可能距離（耐久性）を競ったりしたことに端を発する。

モーター (motor) という単語は、日本語や英語では電気モーター (electric motor) を指すが、ドイツ語では内燃機や外燃機など動力源を意味する。動力源を利用する乗り物による競争などを指す言葉として、19世紀後半にはドイツの学術誌 *Natur und Museum* に Motorsport という言葉が出現しており、競馬場を利用するモータースポーツの地域社会に対する経済的影響について早くも語られている [*Natur und Museum* 1885 : 352]。

### 1-2 モータースポーツの定義

ひとくちにモータースポーツといっても、その定義は曖昧である。日本において「モータースポーツ」という言葉は一般的に、ガソリンや蒸気などを利用する内燃機関や電気等を利

用する動力機関を用いる自動車やオートバイなどで競うスポーツのことを指す。主なエネルギー源を、人力や動物、水力や風力、氷上や雪上での摩擦など自然的なものを利用する一般的なスポーツとはカテゴリーを分けるのが普通である。しかし、国によって「モータースポーツ」という言葉は、定義や使われ方、範囲が異なり曖昧である。そもそもモータースポーツはスポーツと言えるのか。スポーツの中でのモータースポーツの位置づけはどのようなものなのかについての明確な定義付けは、これまでの研究においてなされていないと言える。

そこで、先行研究の検討に入る前に、まずはモータースポーツという言葉の定義を整理しておく。モータースポーツに関連する主な用語は、次のように分類できる（表1）。

表1 モータースポーツに関連する主な用語

総称	モータースポーツ
分類	カーレース、オートスポーツ、自動車レース、モーターサイクルスポーツ、オートバイ競技、モーターボート・レース、エアレースなど
細目	ラリー／クロスカントリーラリー、ロードレース、サーキットレース、耐久レース、ダートトラック、グラストラック、サンドレース、モトクロス、エンデューロ、トライアル、フォーミュラ、ツーリングカー、ヒルクライム、ドラッグレースなど

（出展：『*Encyclopedia of World Sport* [Levinson eds. 1999]、『*Encyclopedia of British Sport* [Cox eds. 2000]、『自動車の百科事典』[2010]、『スポーツの百科事典』（2007）に掲載されているモータースポーツの項目を筆者が整理して作成）

百科事典を調べてみると、『*Encyclopedia of World Sport* [Levinson eds. 1999]』には「Motor Sport」の項目がなく、モトクロス (Motocross)、モーター・ボート (Motor Boating)、モーターサイクル・レース (Motorcycle Racing)、ストック・カー・レース (Stock Car Racing)、ビンテージカー・レース (Vintage Auto Racing) の各種目について解説されているのみで、モータースポーツ全体についての総論の項目はない。

モータースポーツ先進国であるイギリスのスポーツ百科事典『*Encyclopedia of British Sport* [Cox eds. 2000]』も同様で、アントリー (Aintree)、ブランズハッチ (Brands Hatch)、ブルックランズ・サーキット (Brooklands Circuit)、ドニントンパーク (Donington Park)、ヒルクライム (Hill Climbing)、マン島TTレース、マンクスグランプリ (Manx Grand Prix)、モトクロス (Moto-cross)、モトクロス・ド・ネイション (Moto-cross de nation)、モーターボート・レース (Motor Boat Racing)、モーターレース (Motor Racing)、モーターサイクル・レース、オルトン・パーク (Oulton Park)、ラリー (Rallying)、スクランブル (Scrambling)、シルバーストーン (Silverstone)、スピードウェイ (Speedway)、自動車スプリント (Sprinting (Motor Car))、ストックカー・レース (Stock Car Racing) の項目があるが、これらはサーキットの名称、イベント名、種目であり、モータースポーツ全体を総括する解説は見当たらない。

『自動車の百科事典』[自動車技術会（編）2010：67]ではモータースポーツに関連する項目において、「レース」を次のように説明している。

「日本におけるモータースポーツを統括するJAF<sup>8</sup>は、レースを「2台以上の車が同一のコースを同時にスタートし、所定の距離を先に走破するか、または所定の時間内にもっとも長い距離を走行した競技者が上位となる競技」を基本的なレースの定義だとしている。」

しかしこの内容はモータースポーツの一部の解説に過ぎず、これをモータースポーツ全体の解説としてみなすことはできない。1台ずつスタートするタイムトライアル方式の競技や、距離や時間ではなく運転技術（テクニック）を競う競技もあるからである。

『スポーツの百科事典』[田口（編）2007：688]で解説されているモータースポーツの内容は、現代日本においてももっとも一般的に理解されやすい内容を網羅していると言えよう。

「モータースポーツとは、広義には水上や空も含め、発動機を搭載した機材を用いておこなわれるすべての競技を意味するが、慣例としては、陸上における競技のことである。モータースポーツはさらに、4輪の自動車競技（motor racing）と2輪のモーターサイクルスポーツ（motorcycle sport）に大別される。このほかにスノーモービルレースなどもあるが、狭義には4輪と2輪の競技のみに用いられる。」

近年は飛行機のエアレースや水上のモーターボート・レースもモータースポーツとして扱う場合があり、その定義はいまだに変容し続けているといえる。

### 1-3 モータースポーツ統括団体による定義

現在、統括団体ではモータースポーツをどのように定義しているのか。モータースポーツが技術の実証だけでなく、競争の結果を追究する近代スポーツ的なイベントとして開催されたのは19世紀後半で、四輪やオートバイの競技団体が発足したのもこのころである。

自動車の国際的なスポーツ統括団体である国際自動車連盟（Fédération Internationale de l'Automobile、略称：FIA）の定める規則書（sport code）には、モータースポーツとは何かという定義は見当たらない。ただし、FIAはその定めるスポーツコードにしたがい、当該団体が扱うモータースポーツにオートバイやカート<sup>9</sup>にも関与すると明記している [FIA 2010：1]。

オートバイの国際的なスポーツ統括団体である国際モーターサイクリズム連盟（Fédération Internationale de Motocyclisme、略称：FIM）の規則書でもモータースポーツ、あるいはモーターサイクルスポーツの定義は明確ではないが、その種類を国際競技会・コンチネンタル競技会・国内競技会など地域性による格式で分けた上で、ロードレース・モトクロス・トライアル・エンデューロ・クロスカントリーなどの種目とカテゴリーを定義している。また、FIMの競技にはサイドカーが含まれるとしている [日本モーターサイクリス

ポーツ協会 (MFJ) 2010 : 4-5]。

以上をふまえて、本稿ではモータースポーツの定義を「発動機を用いた乗り物の競争、または運転技術の評価を目的とするスポーツ」とし、その範囲を本稿では陸上のモータースポーツのみ扱うこととする。

## 2. 近代スポーツ研究におけるモータースポーツ研究

大規模な国際的モータースポーツが世界で初めて開催されたのは、1894年のパリ (Paris) -ルーアン (Rouen) の都市間レースと言われている。それ以前も、記録に残されていない小規模で短距離の公道レースや、競馬場を利用したレースがヨーロッパや北米を中心に行われていたと考えられ、モータースポーツは近代スポーツの出現とほぼ時を同じくして出現したといえる。競技結果は新聞の販売促進を目的として記事に取り上げられ、技術解説は工学系の学術雑誌や自動車・オートバイ専門誌に詳述されるようになった。それにも関わらず、社会学においてモータースポーツがテーマとして盛んに取り上げられるようになったのは1990年代のことである。

本章では、社会学におけるスポーツ研究の位置付けを概観したのち、モータースポーツ研究が社会学のなかで進まなかった理由を研究史から探る。

### 2-1 社会学におけるスポーツ研究

近代スポーツの社会学的研究の歴史は浅く、盛んになったのは1960年代のことである [マックファーソン (McPherson) 1988 : 17-35]。その研究対象はさまざま、1965年から1981年までのスポーツ研究7473篇を詳細に分析したケニヨン (Kenyon) によれば、1979年-1981年初期のスポーツ研究対象上位10対象は上から①スポーツ：機能と逆機能、②スポーツ参与、③近代スポーツ史、④パーソナリティ、⑤女性、⑥態度、⑦社会化、⑧オリンピック、⑨動機づけ、⑩理論的、に関するものであった [ケニヨン 1986 : 9-25]。

スポーツ研究の初期には「スポーツの起源」「スポーツの本質」の研究が盛んで、たとえばホイジンガ (Huizinga) の「プレイ論」[ホイジンガ : 1938] などがある。しかし、スポーツ研究が盛んになって以降、とくに1990年代以降はその研究対象が拡がり、「体育 (学校スポーツ)」「エリートスポーツ」「プロスポーツ」「アマチュアリズム」「ナショナリズム」「スポーツ・フォー・オール」「メディア・スポーツ」「メガ・スポーツ」「スポーツのグローバリゼーション」「スポーツと暴力」「地域スポーツ」「障害者スポーツ」「スポーツとジェンダー」など理論的アプローチでは社会的背景や機能の研究が、実証的アプローチでは各競技の事例研究が盛んである。

## 2-2 スポーツ社会学におけるモータースポーツ研究

スポーツ社会学におけるモータースポーツ研究は、事例研究を中心に1990年代からオーストラリアやイギリス、北米で盛んになってきたが、その蓄積は十分とは言えない。現代社会において世界中の誰もが知るモータースポーツという分野の研究が、社会学や文化人類学において盛んではなかった理由は、以下の3点が挙げられる。

第一に、モータースポーツをスポーツ行為そのものではなく、青少年特有の活動と結び付けた観戦行為に視座を置く偏った視点で見ていたため、スポーツ行為そのものの研究が進まなかった。第二に、世俗的にはモータースポーツの「スポーツ性」への懐疑があった。第三に、モータースポーツは「みるスポーツ」として発展し、主に専用サーキットなど閉鎖された空間で行うことが主流であるため、モータースポーツ周縁の人びとのダイナミックな変容を捉えにくく、「するスポーツ」としては敷居が高くて参与観察がしづらい点である。

### 青少年特有の活動と結び付けられたモータースポーツ

スポーツ社会学者のマッキントッシュ (Macintosh) は、近代スポーツ勃興を中心としたイギリスのスポーツ論史を著した中で、1959年のイギリスにおいて若年層がオートバイによるレジャー活動<sup>10</sup>に多く支出していることを指摘した [マッキントッシュ 1991]。マッキントッシュ以外にも、オートバイ趣味はモータースポーツや暴走行為も含めて青少年特有の活動であると規定する研究が多い。その理由として、第二次世界大戦直後に沸き起こったアメリカのバイカー (Biker) 文化、1950年代にイギリスで起こったモッズ (Mods) とロッカーズ (Rockers) 文化、1970年代に日本で起こった暴走族 (Boso-zoku) 文化など<sup>11</sup>、青少年期特有の逸脱行為を背景とするサブカルチャーとしてのモーターサイクル文化が注目され、スポーツとしてのモータースポーツがそれらに混同されていたのではないかと考えられる。確かに、モータースポーツの観戦者はサブカルチャーから派生するモーターサイクルカルチャー属性の若者が多かったかもしれないが、モータースポーツ実践者を捉えるには偏った視点だと言える。

とくに近年、オートバイを取り巻く状況は変わりつつある。たとえば、オートバイのユーザーの中心は明らかに中高年に移りつつあり、日本ではユーザーの平均年齢が47歳<sup>12</sup>であるという調査報告がある。アメリカやヨーロッパでも、第二次世界大戦後のバイクブーム時代に若者だった世代のオートバイ回帰現象がみられ、ユーザー層は高齢化している。したがって、年齢階層で論じる研究は見直しが必要である。

1986年に『スポーツ・権力・文化』を著したハーグリーヴズ (Hargleaves) は、スポーツと権力の関係をサッカーなどの民衆スポーツから研究するとし、当該研究ではモータースポーツの扱いは軽くするとした。スポーツと労働者階級を論じる章の中でハーグリーヴズは、1920年代の「新しい高度に商業化されたスポーツ」である「スピード・ウェイ、ツーリ



スト・トロフィー・モーターサイクル・レース<sup>13</sup>など」のスペクテーター・スポーツ<sup>14</sup>（見るスポーツ）が「急速に労働者階級民衆の人気を獲得した」と述べている。

しかし、この論には二つの難点がある。第一に、狭いトラックで「見る・見せる」ことを主体とした娯楽的なスピード・ウェイレースと、宿泊を伴うスポーツ・ツーリズムの要素が大きいメガ・スポーツイベントとしてのTTを同じカテゴリーにくくって論じている点である。第二に、スペクテーター・スポーツとしての人気、新聞などのメディアを通じてなのか、実際に観戦することなのか明確でない点である。TTも新聞を通じてイギリスや世界に報道され、情報を楽しむ労働者階級は多かったと推察されるが、1920年代はまだオートバイが高価な時代であり、わざわざマン島まで愛車のオートバイとともにフェリーで渡って行って、観戦行為を楽しむ層が労働者階級中心だったかは疑問である。

この論文が書かれた1980年代のモータースポーツを取り巻く状況は、ハーグリーブズのいう「メディア・スポーツ<sup>15</sup>」として新聞や雑誌などの紙媒体、ラジオ・テレビなど電波媒体を通じて報道され、スペクテーター・スポーツとして大衆化が進んだ時代である。その報道内容は、公共性の構造転換のなかで発展したメディアの即時性が生んだ「直接反応のあるニュース」[ハーバース 1994:226] が好まれ、レースの勝敗よりもレースの中で起きたアクシデントが好んで取り上げられた。野球であればヒーローの出現をメディアが後押しし、サッカーであれば観衆の興奮——フーリガニズムがとりわけ取り上げられたのである。

### モータースポーツのスポーツ性に対する懐疑

また、モータースポーツはそもそもスポーツと呼べるのだろうか、というジレンマを抱えているとの指摘がある[渡 2007:94-101]。渡は、「サッカーやこれに類するスポーツが、世俗的に「スポーツであること」が自明視されているのに対して、モータースポーツが、「スポーツであること」を疑いの目で見られている」ことの原因として、「サッカーのような競技と産業・技術は外在的に関係する」のに対して、モータースポーツのうちF1<sup>16</sup>を事例に挙げ、「F1は産業・技術を内在的な問題として抱えている」と指摘する。「マシンの性能差がドライバーの技能差を大幅に上回ってしまう」F1は、「競争しているのが、ドライバーなのかマシンなのか」という点において「スポーツであることを疑問視されている」という。

そのような問題点を包含するのは、F1だけでなくオートバイのモータースポーツも同様で、モータースポーツの「スポーツ性」への懐疑が、研究者に一般的なスポーツ・イベントとして認識されてこなかったと考えられる。

### みるスポーツとしてのモータースポーツ

スポーツを余暇活動の面から分析を進めたエリアスとダニングは、スポーツを含む余暇活動が先進工業社会において、「人前で適度に興奮を表す行動を喚起することを社会的に認め

るための飛び地を形成している」と指摘する〔エリアス／ダニング 1995 (1986) : 92-95〕。エリアスらのいう「飛び地」とは、余暇活動における興奮の探求を、感動性の規制と抑制を「模倣的」にほどよく解放したものであると説明する。その飛び地はスポーツから音楽、演劇、映画、レース、賭博、チェスなどほとんどの余暇活動に当てはまるとしている。しかし、エリアスが取り上げた「レース」とは、あくまで「レース観戦行為」のことであり、モータースポーツの一面的な側面を扱っているにすぎない。

エリアスとダニングがスポーツなどに関して「すべての模倣のレジャー活動に関連した〈緊張〉は『刺激的でない社会における刺激の追求』を示している、と示唆」したことについて、モータースポーツを「ハイリスクの眩暈スポーツ」に位置づけたドネリー (Donnelly) は、チクセントミハイ (Csikszentmihalyi) の〈フロー〉理論を援用して否定している。むしろ、ハイリスクスポーツは参加者にとって「刺激に対する高いニーズによって特徴づけられる」というのである〔ドネリー 1988 (1977) : 483-485〕。そもそも、ドネリーはモータースポーツのリスクを他のスポーツと比較し、「すべてのスポーツのなかで最も死亡率が高い」とし、モータースポーツを商業的なハイリスクスポーツと規定している。しかし、これは極端な事例をことさらに取り上げていて事実を反映していない。ベトナム戦争後の1970年代に書かれたこの論文のなかでドネリーは、ハイリスクスポーツが普及した理由は、1960年代のカウンターカルチャーが評価された結果なのか、それとも社会に対する反作用だとするのは今後の課題だとしている。モータースポーツが実際にハイリスクであることと、ハイリスクのイメージが強いということは、分けて考える必要がある。

エリアスとダニングだけでなく、モータースポーツはスポーツ研究においてこれまで、「みるスポーツ」の「みる側」に主眼を置いて研究されてきた。理由として、モータースポーツ実践の場は戦後、レース専用サーキットに主流を移し、閉鎖された空間で行われるようになったため、モータースポーツ周縁の人びとのダイナミックな変容を捉えにくかったことが挙げられる。また、モータースポーツは「するスポーツ」としては敷居が高く、モータースポーツ実践者を対象とした参与観察がしづらい点も影響しているだろう。

スポーツにどのように関わるかについて近年、「するスポーツ」「みるスポーツ」に加えて「ささえるスポーツ」が注目されているとされる〔山口 2004 : 3〕。「ささえるスポーツ」の活動とは、日常的に関わるクラブやスポーツ団体の運営や指導などのボランティア、イベント時に関わる審判や運営、医療や救護などの専門ボランティアと案内や受付、交通整理などの一般ボランティア、それにスポーツ選手のボランティア活動がある〔山口 2004 : 8〕。普段の練習からイベント運営まで、スポーツ実践全般において「ささえる」人びとの活動はなくてはならない重要なものになっている。この「ささえる」側を分析するには、エリアスらの「飛び地」論には生活者目線が含まれておらず、説明不足といえるだろう。

スポーツの構造を「かかわり合い」から概念構築したケニヨン、スポーツにおける社会

的役割を一次的には競技者・運動選手・プレイヤーと規定し、二次的役割は直接的消費者としての観衆、間接的消費者としての視聴者・聴取者・読者、生産者としてのコーチや統括団体、審判、プロモーターなどに分類した [ケニヨン 1988 (1969) : 57-65]。しかし、ケニヨンの研究にもスポンサーやパトロン、ボランティアなど支援者の視点は現れていない。

以上のように、モータースポーツは「みるスポーツ」の視角が中心課題であった歴史があり、誰がモータースポーツの「みる」「する」「ささえる」スポーツのスポーツ行為者かという点についてこれまではっきりとした分析枠組みが組み込まなかったことが、スポーツ社会学のなかでモータースポーツ研究が進まなかった要因と考えられる。

### 3. モータースポーツ研究の動向

本章ではまず、分野に関わらずモータースポーツの研究史を整理した上で、モータースポーツの史学的研究を概観する。次に、モータースポーツの代表的な社会学的研究の動向と、文化人類学的研究の動向から課題を検討する。

#### 3-1 モータースポーツ研究史概観

モータースポーツそのものに関する学術書や論文を俯瞰して大まかに分類すると、6割ほどが工学系の技術論文であった。次いで競技者の運動生理や怪我、救急などの医学的な研究が占める。

モータースポーツそのものに関する社会科学系の研究としては、その商業的側面から、主にメーカーや当該関連産業へのメリットや開催地域に対する経済効果、メディアを通じた文化や消費の広がり进行分析する経済学やマーケティング学、産業社会学、あるいは観光社会学の領域での研究が中心となっている。また数は少ないが、モータースポーツ時の事故に関する法学的研究、競技者の心理や観客などの心理学的研究もある。一般書には各モータースポーツカテゴリー、たとえばフォーミュラ1やオートバイのグランプリレース、定地・定期的に行われているレースイベント、人物伝などを史学的にまとめた書籍が多数あり、歴史や社会的背景を知る上で参考になる。

バーガー (Berger) は、自動車の歴史と文化に関する書籍約2500冊を網羅したリファレンスガイドを著した。文化社会学の章では、スポーツとしてのモーターレーシング (Motor Racing) を取り上げ、北米のモータースポーツ黎明期は新聞メディアとの関係性が深いことを指摘した [Berger 2001 : 275-306]。

モータースポーツ研究を時系列でたどっていくと、時代によって傾向が変化していることがわかる。モータースポーツそのものを対象とした社会科学的な研究が盛んになるのは1980年代後半以降で、モータースポーツの大衆化やメガイベント化とともに、地域社会との関係性に焦点を当てる研究が出現した。また、2000年代以降は自然環境への影響を取り上げた研

究も増えつつある<sup>17</sup>。

近年は、モータースポーツの政治利用に関する史学的な再考察も散見される。ウィリス (Willis) は、ナチス・ドイツによるモータースポーツの政治利用について研究した [Willis 2009]。オリンピックを始め、スポーツを利用して国威発揚を政治的に促すという点において、モータースポーツは近代スポーツの発展と同様の過程をたどっているといえる。

### 3-2 モータースポーツ史からみる近代産業革命と社会の相互関係

モータースポーツの史学的研究は、19世紀末のモータースポーツ黎明期から第二次世界大戦後の過渡期にかけてのモータースポーツを研究した領域として、機械産業の発展や、自動車やオートバイそのものの技術の発達と結びつけた歴史学的な考証を行ったものが中心である。たとえば、オートバイ産業の勃興からオートバイ文化、モータースポーツなどの発展過程を多角的に論述したイクソン (Ixion) の *Motor Cycle Cavalcade* [Ixion 1950]、オートバイの技術的な発展の中でオートバイのモータースポーツの発祥を述べたコンター [Caunter 1970]、オートバイ産業の歴史を中心としたウォーカー [Walker 2005]、日本のオートバイ産業が世界のオートバイ産業に与えた影響を研究したアレキサンダー [Alexander 2008] など多くの蓄積がある。アレキサンダーは、日本の100年に亙るオートバイ産業の歴史の中で、愛好家やアマチュア、プロフェッショナル、公営ギャンブルのオートレースなどのモータースポーツ活動が、オートバイ産業と相互に作用し発展してきたことを指摘している。

アメリカ人の生活様式を変えた技術革命とスポーツの相互関係を論じたベッツ (Betts) は、自動車の発明とモータースポーツの興隆の背景にはカメラや印刷技術、空気タイヤの登場、大西洋電信ケーブルや無線電信などの近代文明は相互に影響しあってスポーツの隆盛に寄与したとする。そのうえで、19世紀に始まった「近代スポーツは（人びとの生活に対する）産業化の解毒剤であると同時に、産業化の産物であった」[ベッツ 1988：430-431] という。

このようにモータースポーツの発展過程の背景には、メーカーの努力や愛好家の支援だけがあったのではなく、社会生活や社会文化が相互に作用し合ってきたことがわかる。

近代スポーツ史においてモータースポーツを一つの項目として取り上げた重要な研究として、『スポーツと文明化』[エリアス／ダニング：1995]の著者のひとり、ダニングらが編纂した *Sport Histories* [2004] がある。その中でツイッツェン (Twitchen) は、エリアスの「文明化の過程理論」を用いて、19世紀後半から20世紀初頭のモータースポーツ黎明期のイギリスとフランスにおけるモータースポーツの発展過程の違いを、社会的背景の違いから論じた。それによれば、フランスでは貴族階級が都市化に対して大きな力を持ち、自動車を都市化の誘因力として奨励したためモータースポーツが発達した。これに対して、イギリスでは自動車に反対する法規制が厳しく、初めてモータースポーツが開催されたときもリスクを最小限にとどめる努力が必要とされたという。このことは、エリアスらの研究で明らかにさ

れているボクシングやサッカーなど近代スポーツの歴史で、暴力が競技規則によってコントロールされることと同様の特性を持つ、としている [Twitchen 2004 : 121-136]。ツイッツェンの研究はモータースポーツを、権力と民衆、貴族階級と労働者階級、文明と文化などというように単なる社会構造の二項対立的に分析するのではなく、歴史と政治を踏まえた内容となっている。

ただしツイッツェンの研究では、19世紀末から20世紀初頭の大ブリテン島において上流階級が好んだ自動車文化に対する庶民の反感<sup>18</sup>を、マン島やアイルランド島のレース開催が吸収してきたという史実については言及していない。

### 3-3 社会問題としてのモータースポーツ研究

地域社会に対するモータースポーツの影響に関する研究が盛んなのはオーストラリアである。とりわけ取り上げられる事例は、オーストラリアのバサースト (Bathurst) で開催されているマウントパノラマ (Mount Panorama) 公道レースが1970年代から80年代にかけて社会問題化した事例である。私設観光道路を閉鎖して行うこのレースには、愛好家がオートバイで数千人から数万人集まり、無法地帯のような混乱を生み出していた。警察の取り締まりによって数十人から数百人の逮捕者が出るという状況が何年も続いていたという。

カンニン (Cunneen) とリンチ (Lynch) による研究では、自由に観戦したり、レースイベント前後にコースを走ったりしたい観客が警察の規制に対して一部暴徒化することを、サッカーファンの暴徒化を表す「フーリガニズム (hooliganism)」を援用して、「思想のない反警察的行動」であると指摘した [Cunneen and Lynch 1987 : 218]。

ベノ (Veno) とベノ (Veno) は、公道レースとして行なわれるバサーストのレースイベントと、レース専用サーキットで行なわれるフィリップアイランド (Phillip Island) の世界グランプリレースを比較し、公共空間を利用するスポーツと、私設のスポーツ専用空間を利用するスポーツの特徴をそれぞれ抽出し、より閉鎖的で所有者がはっきりしている場所の方が、治安の混乱を防げると結論付けている<sup>19</sup> [Veno and Veno 2006]。

イベントを観光学の見地から研究したホール (Hall) は、イベントが地域社会に与える社会心理的効果について研究したアーノルド、フィッシャー、ハッチとペイックス (1989) の研究において「1985年にオーストラリアのアデレードで開かれたグランプリレース (フォルミュラ<sup>20</sup>/オートレース<sup>21</sup>) の実態調査を行い、そこでは、経済効果よりは、住民の心理的な満足感や歓喜の感情の高揚といった社会心理的効果の方が大きかったと指摘している」 [須田 1994 : 49-50] とした研究に対し、ゲッツ [Getz 1991] を引用して「無形物を評価するための金銭的尺度の試みは疑問」であるとし、「優良イベントの効果の研究は実証的で非批判的アプローチ」であると批判した [ホール 1996 : 93-102]。

フレッドライン (Fredline) らの一連の研究 [Fredline 1998, 2000a, 2000b] は、オース

トラリアで行われたモータースポーツを事例に、地域社会とモータースポーツとの関係性をマーケティング的に分析している。フレッドラインは、エイプ (Ap) による、ツーリズムが地域住民に与える影響の研究に用いた社会交換理論 [Ap 1992] を、愛好者や仕事で関わる人ほど利益を感じやすい結果を示してしまうと批判し、より社会的表象をあぶり出しやすい社会表象理論を用いた比較調査を行った。その枠組みは、モータースポーツ開催地をホスト・コミュニティと規定した上で、経済的・社会心理的な影響を量的調査で明らかにするというものである。

「みるスポーツ」としてのモータースポーツイベントは、そこで行われているスポーツ・イベントが競技者と運営者だけでなく、それを観ている観客ら群衆の風景、歓声、熱気が加わり生み出される「場」が重要な視点となる。しかし、観客は必ず外からやってくる訪問者とは限らない。とくに公道スポーツの場合、住民も観客として観戦することも多い。この点で、ホストを地域社会、ゲストを訪問者として扱うこれらフレッドラインの研究は二項対立的と言え、住民がホストだけでなく、観客としてゲストの立場になり得ることを想定していないという難点がある。

都市社会学の立場からモータースポーツを研究しているロウズ (Lowes) は、イベント開催地と観客を枠組みとした地域社会に対するモータースポーツの影響の研究を進めた。オーストラリアの公園を利用した半公道レースを事例に、新自由主義的政府の政治的な動きと地域住民の関心を分析したところ、新自由主義的政府が進めたモータースポーツイベント開催の推進は、社会福祉的な目標よりも企業的な方針で進められたという。ロウズは、モータースポーツ開催によって地域住民の権利は中断され、その政治的プロセスは独裁的かつ権威主義的だと批判した [Lowes 2002、2004]。

いっぽう、本格的なサーキットが国内に十数カ所もあり、自動車やオートバイメーカーがひしめく日本では、モータースポーツを地域おこし [相垣 1994] や都市政策 [池田 2001]、社会的意義 [田中2005] として捉えた論文がある。しかし、いずれも詳細な分析には至らず、地域社会におけるモータースポーツの位置づけという意味での研究の蓄積はいまだ浅い。

### 3-4 モータースポーツに関するナラティブ分析の一例

文化人類学におけるスポーツ研究が確立したのもスポーツ社会学同様に歴史が浅く、1980年代以降のことである<sup>22</sup>。その焦点は「民族スポーツ」や「スポーツの発祥」に当てられたものが多く、モータースポーツを含む近代スポーツを事例にした研究の蓄積は、スポーツ社会学に比べてさらに少ない。

スポーツの発祥や発展を扱った文化人類学的な研究では、19世紀末から20世紀初頭において、西欧社会の近代産業革命やメディアの発達と近代スポーツの普及に深い関係があり、社会の工業化がモータースポーツや自転車レースの発祥に影響を与えたという指摘がある [木

村2001：106-109]。しかし、第二次世界大戦後、急激にグローバル化し普及したモータースポーツに対する文化人類学的な事例研究は数少ない。理由として第一に、社会学におけるモータースポーツ研究の状況と同様、モータースポーツは「みるスポーツ」として発展し主にサーキットなど閉鎖された空間で行うことが主流になったため、モータースポーツ周縁の人びとのダイナミックな変容を捉えにくいことが挙げられる。第二に、「するスポーツ」としてはコストが高いことや、マシンのチューニングなどは機密が多く、外部の人間には敷居が高いため、参与観察がしづらいことが挙げられる。

とはいえ、注目すべき研究もある。ノルウェーの社会人類学者、ホワイティング(Whiting)は、イギリスのヴィンテージ・スポーツ・カー・クラブ(Vintage Sport Car Club、略称VSCC)のメンバーの語りと歴史的文献を比較研究し、『創られる由来神話<sup>23</sup>(Origin Myths in the Making)』[Whiting：2007]を著した。

ホワイティングはVSCCメンバーに「なぜ、あなたは70年も80年も経っているクルマに時間とお金をかけるのですか？」の問いを持ってインタビューを試みる。しかし、たいいてい返ってくる返答は「……血が騒ぐからさ！」など抽象的な言葉ばかりであった。彼らの語りを分析して明確になったのは、メンバーたちが語ることはいつも、彼らの「情熱」であり、「苦労話」であり、所有しているクルマにどのような物語があるのか飽きるほど聞かせることであった。ホワイティングは、歴史学者のウィリアム・H・マクニール(William Hardy McNeill)の「歴史的語りを書くなら——神話とは、私たちが“我々”と“彼ら”を安全に単純化させたい過去である」の言葉を引用しつつ、VSCCメンバーが語るクルマの「由来神話」とは、VSCCメンバー自身が他者と差別化し、さらに一目置かれるための語りであったことを明らかにした。

ホワイティングの研究は、モータースポーツ周縁に位置付けられる愛好家団体の愛好者に関するものだが、フィールドワークを通じた文化人類学的アプローチはTTを研究する上で、「する」「みる」「ささえる」スポーツそれぞれの社会的文脈を捉えたり、時系列上のダイナミックな変容を捉えたりするのに適している方法であるといえよう。

#### 4. マン島TTレースに関する先行研究

ここまで、モータースポーツは社会科学におけるスポーツ研究の中でどのような位置づけがなされてきたかを検討してきた。これまでのモータースポーツ研究はまず、「みるスポーツ」として偏った視点から研究されていたり、「ささえるスポーツ」の視点が不足していたりしたことを指摘した。次に、モータースポーツが社会問題として研究テーマに取り上げられてきた点や、文化人類学的研究の蓄積が少ないことを指摘した。

本章ではそれらを踏まえ、筆者の研究フィールドであるマン島やTTに関する先行研究はどのような議論がなされているのか、主要な先行研究を検討する。

#### 4-1 社会資源としてのモータースポーツ

TTの最大の特徴は、道路という公共空間を使うモータースポーツとして黎明期から現代まで続いている点である。歴史が長いだけにモータースポーツの変遷を見てとれるイベントであり、マン島の史学的な研究や、地域研究の一項目としてTTが取り上げられることが多い。

モータースポーツが社会問題として取り上げられることの多いオーストラリアとは対照的に、マン島研究のなかでのTTは、マン島の経済的発展に深く関わったという経過から、好意的に捉えられていることが多い。たとえば、*A New History of the Isle of Man volume V* [Belchem(ed.)2000] や、*Profile of the Isle of Man A Concise History* [Winterbottom 2007] では、TTがマン島の社会生活環境に与えた影響について、道路舗装などの社会インフラストラクチャーの整備や、経済的メリットを例に出して言及している。1970年代に起こったトップライダーによるTT参戦ボイコット事件<sup>24</sup>や、*Daily Telegraph*が、1996年にレース開催日の合間の日曜日にオートバイによるツーリストがTTコースを走り回る、通称「マッド・サンデー (Mad Sunday)」<sup>25</sup>で事故が多発し批判したことも取り上げているが、それでも住民はTTの安全対策などに公金を使うことに好意的である、という [Faragher 2000 : 414]。

このようにTTの長い歴史の中で、TTはスポーツ・イベントとしてだけでなく、マン島の地域社会にとって生活に深く根付き、その結果、TTは地域住民にとって社会資源として捉えられていると考えられる。しかし、これらの著作はマン島で出版されたものであり、それゆえ批判的にTTを取り上げている部分はほとんどないとも考えられる。

#### 4-2 地域アイデンティティ化したモータースポーツ

ボーキンス (Vaukins) は史学の立場から、地域住民にとってのモータースポーツイベントとその変容を研究している [Vaukins 2007]。ボーキンスは、TTの政治・経済・地域アイデンティティを研究していくなかで、TTが批判にさらされ、テクノロジーが変化し、地域住民が不便を強いられても100年続いてきた理由を、①マン島の政治的背景と独自の憲法が大きく影響し、変化していく中でもマン島政府の理解なしには続けることはできなかったこと、②経済的な重要性から、マシンのショーケースとしてメーカーはTTで闘うようになり、島ではTTに興味を持ったグループがレースを商売に利用するようになったこと、③TTがマン島のアイデンティティの一部となったことを挙げている。

マン島の人びとは、どのようにして〈彼らの (Their)〉レースを支持するようになったのか。ボーキンスはまず、TTコースがマン島の風景の中にあることを指摘する。コースは昔も今も日常交通として使われ、レースのスタートとゴール場所にあるグランドスタンドやスコアボードは、永遠にそこに存在している。それゆえにマン島住民は、日常生活の中でも自然にTTを思い起こさせられるのである。



また、TTは昔も今も、たいてい外部の者<sup>26</sup>から危険であると批判を浴びてきた。しかし、マン島はその都度、TT擁護の立場を取っていた。第二次世界大戦以前、マン島では英国議会からの独立性を高めたい、政治改革したいという機運が高まっていたからである<sup>27</sup>。ボーキンスは文献の分析から、マン島住民がTTを語る時、そのような歴史を経た第二次大戦後、一人称単数形ではなく、一人称複数形のweやus、ourを使うように変化していることを突き止め、TTが地域アイデンティティとしてのモータースポーツの地位を獲得していることを指摘した<sup>28</sup>。そして、ケルトやバイキングの伝統的文化と並び、TTはスピードとテクノロジーを表象とするマン島の近代的自我の一つを形成しているとしている。

ボーキンスの研究は開催地側の地域社会研究として、マン島の事例研究においては貴重なものである。しかし、ボーキンスが例に挙げた文献のテキストは、マン島住民の言葉ではあっても、それはTT関係者か熱心なファンの言葉である。果たして、これがマンクス<sup>29</sup>全体のアイデンティティを代表していると言えるかは、さらなるモノグラフの積み重ねが必要であろう。

#### 4-3 観光資源としてのモータースポーツ

モータースポーツの観光資源化を、開催地域のマン島側からではなく、渡航する観光者の出身地側からマーケティング的に分析したのが、ニュージーランドの経済学者、ラム(Lamb)である [2007]。

ラムは、近年ニュージーランドからマン島TTへの観光客が増えている要因を、マン島TTの持つブランド性と、国際マーケティング戦略の側面に焦点を当て、クライストチャーチ住民に対する意識調査を元に明らかにした。それによれば、クライストチャーチ(Christchurch)においてマン島TTの認知度は90%近くある。要因として近年、TTにおけるニュージーランド人選手の高いレベルの活躍があるとする。クライストチャーチでは、TTの開催時期や、ニュージーランド人の選手名など詳しいことを知っている人は少ないが、TTをテレビで観戦したことによりTTの存在を知り、TTが世界的なスポーツ・イベントだと認識されている。その結果、6割ほどがTTを企業や団体が販売促進目的に利用することに対して好ましいイメージを抱いていることがわかったという。

モータースポーツイベントは「危険」なイメージがつきまといやすいが、当該スポーツで活躍している選手などを戦略的に販売促進に取り入れれば、肯定的イメージを獲得できる、というのである。

ラムの研究は、モータースポーツの持つイメージが、地球の裏側の観光客の消費動向に影響を与えた背景を明らかにしている。モータースポーツが国際的な高い評価を得ることは、観光客だけでなく、開催地域社会にとっても肯定的なイメージを持たせる要因になると考えられ、「観光資源」の資源たる価値の一側面を探る参考になる。

#### 4-4 ツーリストの「まなざし」とモータースポーツ

TTを開催地側の視点で捉えたボーキンスの研究に対して、開催地の外から観光の視点で捉えたのがラムの研究であった。さらに、TTにオートバイで訪れる観光客が何を求め、何を見ているのか、アーリの「観光のまなざし論」[アーリ 1995]などを援用しつつ、モータースポーツ・ツーリズム特有の場所 (the place) と社会空間化 (social spacialisation) から観光客の「体験」を身体論的に論じたのが、経済学と社会学からオートバイ市場の消費行動を研究しているクローサー (Crowther) である [Crowther 2007]。

クローサーによれば、商品としてのTT観光は、明確にオートバイとマン島の風景とが関係し、その価値が成立しているという。マン島を訪れる観光客のTT体験は、リバプール (Liverpool) のマン島行きフェリーに乗り込むところからすでに始まり、マン島に到着すると首都ダグラス (Douglas) のプロムナードは「TT巡礼者」で溢れる。観光客はレースを見てレーシングライダーがどのように走るのか目撃し、楽しさや情熱、リスクや失敗などの感覚を経験する。オートバイはそれらの体験を観光客に媒介するものであり、マッド・サンデーで走ることは、彼ら自身の神話を生成するという。TTにおいて観光客は、単にオートバイの経験をするというだけでなく、無意識的に景色と空間の内部で行動している。マン島の道路空間を使うということが観光客の経験の一部になるのである、としている。

前述したラムの研究もクローサーの研究も、スポーツ・ツーリズムとしてのモータースポーツ研究であり、対象を観光客、または観光のまなざしを持つ人びとに絞っているため、TTの「イメージ」や「風景・空間」がいかんにして開催地域社会で創られてきたかについては言及されていない。そういう意味で、「TTコースはマン島の日常の中にある」と指摘し、それが地域社会のアイデンティティ形成に影響を与えたとするボーキンスの研究は、TTの成り立ちの背景を浮かび上がらせるのに重要な視点を与えてくれるのである。

以上のように、マン島研究の中でのTTは、常に肯定的に捉えられてきたことを指摘した。なぜ、ネガティブな側面が全面に現れてこないのだろうか。その点については、生活に密着しているモータースポーツ文化として深く描き出すことであぶり出すことができるのではないかと考えている。

また、TTに関する先行研究は主にスポーツ・ツーリズムの側面に焦点が当てられてきたが、スポーツ実践から発生するスペクタクルとして伝わる身体感覚や、スポーツ実践者と地域社会との関係性についての研究は少なく、それらの視点を深めることもモータースポーツ文化を研究する上で今後の課題と言えるだろう。

#### おわりに——モータースポーツ研究の課題と展望

モータースポーツは19世紀後半に近代スポーツと時を同じくして発祥したにも関わらず、これまで社会科学の分野における研究蓄積が少ないことを指摘してきた。そもそもモータ

ースポーツとは何かという定義付けも、国による様々な発展の違いやカテゴリーの細分化により曖昧なままであり、モータースポーツ統括団体や国によって異なったりするなど、いまだに変容し続けている。

スポーツ社会学におけるモータースポーツ研究が盛んになり始めたのは1990年代のことである。それ以前のスポーツ社会学においてモータースポーツは、擬似的体験にスリルを求める若者たちを結び付け、青少年特有の逸脱行為の延長として捉えられていたり、労働者階級に人気のスポーツであるとしたりしたように、年齢層や階級層など偏った視点で論じられていた。一般的な近代スポーツ研究に比べて、モータースポーツ研究はそのスポーツ性に対する懐疑も相まってスポーツの本質への視点をあやふやにしまい、基幹となるモータースポーツ研究が育ちにくかったと言えるのではないだろうか。

また、エリアスとダニングの言説に代表されるように、モータースポーツを「みるスポーツ」としての視点だけで捉えている研究が多い傾向にあった点も本研究で明らかとなった。スポーツ実践の構造は、「する」「みる」だけでなく、近年「ささえる」という視点が注目されている。スポーツ文化の普及やスポーツ人口の拡大に伴い、スポーツは直接的なボランティア活動や間接的なサポートなしには成り立たない文化的活動になってきている。そして、「ささえるスポーツ」としてスポーツに携わることも「意義と価値が認められる」ようになってきた [山口 2004: 3]。とくに公道を利用するモータースポーツのように大がかりなスポーツ・イベントは、地域社会の理解が不可欠である。そういう意味でも、「ささえる」視点をモータースポーツ研究に取り入れることで、研究の可能性を広げられるはずである。

スポーツ・ツーリズムの視点によるモータースポーツ研究では、フレッドラインの研究を代表として、開催地と観客を「ホスト・ゲスト」として捉える二項対立的な視点を軸にした論考が多かった。しかし、地域住民も観客に成り得るし、観客がやがてボランティアとして当該モータースポーツをささえる立場に転換する可能性もあるが、それらには触れられてこなかった。スポーツの構造における役割が転換、あるいは転回する可能性があることを前提に論じるには、やはり「ささえるスポーツ」の視点が重要である。

モータースポーツと近代的文明の発展や産業経済の発展、モータリゼーションとの相互関係についての研究は十分な蓄積があるといえる。しかし、地域社会との相互関係を捉えた研究の蓄積はまだ浅いと言わざるを得ない。地域社会に着目した研究でも意識調査に終始し、モータースポーツイベント開催までの過程や変遷をとらえたものは数少ない。それら踏まえると、今後の課題として、誰が「する・みる・ささえる」のスポーツ実践者かという枠組みだけではなく、スポーツ実践者は誰がどこでどのように行動し、それらの枠組みに可逆性があるのかなのか、さらに分析枠組みを検討する必要があるだろう。そこから、より複雑な相互関係と歴史の変容を解明することができるだろう。

TT関連の先行研究では、TTを社会資源との関連で捉えている研究、地域アイデンティテ

ィとしてのモータースポーツとして捉えている研究、観光資源として捉えている研究、ツーリスト側の「まなざし」を捉えた研究を取り上げた。これらの研究にはTTに深く関わっている人びとの「ささえる」「みる」スポーツの視点があるが、「するスポーツ」の視点は薄い。また、生活に組み込まれているモータースポーツ文化としてのTTは、モータースポーツに関わらない人びとに対しても何らかの影響を与えているはずである。そこで今後は、「するスポーツ」の視点とともに、モータースポーツに直接関わらない周縁の人びとの生活まで考察することで、より深い論考につなげていけるのではないかと考える。

以上の課題から、する・みる・ささえるに加えて地域社会のスポーツ周縁の人びとの生活を重ね合わせていくことにより、地域社会におけるモータースポーツとの相互関係とその変容を、より詳らかに立体的に描くことが可能となるだろう。

さらなる今後の課題としては、モータースポーツ研究に地域社会という枠組みを設けるならば、地勢的な場所性と「スポーツ空間」の視点も重要であると考えられる。巨大なサッカー場を松村は「よそよそしい風景として「白いスタジアム」がそこにある」[松村 2006：16] と比喩したが、公道を利用するスポーツ、すなわち「公道スポーツ」はいわば、その対角線上にあると言えるのではないか。

マン島TTレース100年以上の歴史において地域社会とモータースポーツの相互関係や発展過程と変容を捉えるためには、「する・みる・ささえる」というスポーツの構造それぞれと、場所性と空間の視点を背景にしたモータースポーツの社会的文脈を踏まえて、分析枠組みを偏らせることなくスポーツに関わらない周縁の地域住民も含めて、さまざまな角度からエスノグラフィーを積み重ねることが必要と考える。

## 【参考文献】

Ap, J.

1992 Residents' Perceptions on Tourism Impacts, *Annals of Tourism Research*, 19 (4) : 665-90.

Alexander, W. Jeffery

2008 *Japan's Motorcycle Wars : An Industry History*, Honolulu : University of Hawai'i Press.

Alford, Steven E. and Suzanne Ferriss

2007 *Motorcycle (Objekt)*, London : Reaktion Books.

Berger, L. Micheal

2001 *The Automobile in American History and Culture : A Reference Guide*, Connecticut : Greenwood Press.

Caunter, C. F.

- 1970 *Motor Cycles a Technical History*, London : Science Museum.
- Cox, Richard, Grant Jarvie and Wray Vamplew  
2000 *Encyclopedia of British Sport*, Oxford : ABC-CLIO.
- Crowther, Geoff  
2007 Embodied Experiences of Motorcycling at the Isle of Man TT Races, In *International Journal of Motorcycle Studies*, November 2007 : Special TT Centenary Issue. On line article, [http://ijms.nova.edu/November2007TT/IJMS\\_Artcl.Crowther.html](http://ijms.nova.edu/November2007TT/IJMS_Artcl.Crowther.html), International Journal of Motorcycle Studies.
- Cunneen, C,  
1987 A Historical Analysis of Police/Spectator Conflict at the Bathurst Motorcycle Races, *Sporting Traditions*, 3(2) : 217-238.
- Cunneen, C & Lynch, R,  
1988 The Social Meanings of Conflict In Riots At the Australian Grand Prix Motorcycle Races, *Leisure Studies*, 7(1) : 1-20.
- Faragher, Martin  
2000 Cultural History : Motor-Cycle Road Racing, In *A New History of the Isle of Man volume V The Modern Period 1830-1999*, edit by Belchem, John, pp. 411-416, Liverpool : Liverpool University Press.
- Fredline, E., and B. Faulkner  
1998 Resident reactions to a major tourist event : The Gold Coast Indy car race, *Festival Management and Event Tourism*, 5(4) : 185-205.
- Fredline, Liz  
2000a Host Community Reactions to Motorsport Event : The Perception of Impact on Quality of Life, In *Sport Tourism Clevedon*, edited by Ritcie and Adair. Bristol : Channel View Publication.
- Fredline, E., and B. Faulkner  
2000b Host Community Reactions : A Cluster Analysis, *Annals of Tourism Research*, 27(3) : 763-784.
- Getz, Donald  
1991 *Festivals, special events, and tourism*, New York : Van Nostrand Reinhold.
- Ixion  
1951(1950) *Motor Cycle Cavalcade*, London : Iliffe & Sons, Ltd.
- Lamb, Charles  
2007 New Zealand and The Isle of Man TT : History of Kiwi Involvement, Public

Perceptions of an Iconic Event and Potential Marketing Implications, In *International Journal of Motorcycle Studies*, November 2007 : Special TT Centenary Issue. On line article, [http://ijms.nova.edu/November2007TT/IJMS\\_Artcl.Lamb.html](http://ijms.nova.edu/November2007TT/IJMS_Artcl.Lamb.html), International Journal of Motorcycle Studies.

Levinson, David and Karen Christensen (eds.)

1996 *Encyclopedia of World Sport : From Ancient Times To The Present*, Oxford : ABC-Clio.

Lowes, Mark Douglas

2002 *Indy Dreams and Urban Nightmares : Speed Merchants, Spectacle, and the Struggle over Public Space in the World Class City*, Toronto : University of Toronto Press.

Lowes, Mark

2004 Neoliberal Power Politics And The Controversial Siting Of The Australian Grand Prix Motorsport Event In An Urban Park, *Society and Leisure*, 27 : 69-88.

Lynch, Rob

1991 Disorder on the Sidelines of Australian Sport, *Sporting Traditions*, 8(1), 50-75.

Senckenbergische Naturforschende Gesellschaft (ed.)

1885 *Natur und Museum*, (70). Frankfurt : Senckenbergische Naturforschende Gesellschaft.

Simone, J. Daniel

2009 *Racing, Region, and The Environment : A History of American Motorsports*, Florida : University of Florida.

The Solomon R. Guggenheim Foundation (ed)

1998 *The Art of The Motorcycle*, New York : Guggenheim Museum Publications.

Twitchen, Alex

2004 The Influence of State Formation Processes on the Early Development of Motor Racing In *Sport Histories, Figurational Studies of the Development of Modern Sports*, edited by Dunning, Eric, Dominic Malcolm and Ivan Waddington, pp. 121-136, Oxon : Routledge.

Vaukins, Simon

2007 The Isle of Man TT Races : Politics, Economics and National Identity, In *November 2007 : Special TT Centenary Issue*, On line article, [http://ijms.nova.edu/November2007TT/IJMS\\_Artcl.Vaukins.html](http://ijms.nova.edu/November2007TT/IJMS_Artcl.Vaukins.html), International Journal of Motorcycle Studies.

Veno, Arthur and Elizabeth Veno

- 2006 Situational Prevention of Public Disorder at the Australian Motorcycle Grand Prix, In *Crime Prevention Studies*,(17).

Walker, Mick (ed.)

- 2005(1997) *The History of Motorcycles*, London : Chancellor Press.

Whiting, Rix Matthew

- 2006 Origin Myths In The Making, In *Betwixt and Between : Sosialantropologistudentenes Arbok 2005 Master og Hovedfag 2005*, 331-347.

- 2007 *Men & Motors : Myth-Making and the Emulation of a Past Elite Class*, Oslo : University of Oslo.

Willis, Roger

- 2009 *The Nazi TT : Hitler's 1939 Propaganda Victory on the Isle of Man*, Peel : Motobusiness.

Winterbottom, Derek

- 2007 *Profile of the Isle of Man A Concise History*, Ramsey, IoM : Lily Publications.

アーリ, ジョン

- 1995 (1990 ; 2<sup>nd</sup>. ed. 2002) 『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』東京 : 法政大学出版局. (原題 : *The Tourist Gaze*)

相垣幸博

- 1994 「サーキットと地域おこし」『都市問題』85 (12), 71-78ページ.

池田順一

- 2001 「スポーツの周縁と都市政策 (特集 これからのスポーツ振興施策)」『都市問題研究』53 (5), 31-42ページ.

エリアス, ノルベルト / エリック・ダニング (著)

- 1995 『スポーツと文明化——興奮の探求』大平章 (訳), 東京 : 法政大学出版局.

木村吉次

- 2001 『体育・スポーツ史概論』106-109ページ, 東京 : 市村出版.

ケニヨン, S. ジェラルド

- 1988 (1969) 「スポーツとのかかわり合い——概念構築のための試論とその結果」『スポーツと文化・社会』ジョン・ロイ・W. Jr. (編), 糸野豊 (訳), 57-65ページ, 東京 : ベースボールマガジン社.

- 1991 (1986) 「スポーツ社会学の発展における社会理論の意義」『スポーツと社会理論』C. R. リース・A. W. ミラクル (編), 菅原禮・丸山富雄・日下裕弘・市毛哲夫 (訳), 9-25ページ, 東京 : 不味堂出版.

佐伯聰夫

- 1997 「メディア・スポーツ論序説：メディア・スポーツの構造と機能－問題の所在と分析の視点のために」『体育の科学』47（12），932-937.

自動車技術会（編）

- 2010 『自動車の百科事典』東京：丸善.

須田直之

- 1994 『地域開発の社会学』青森：北の街社.

寒川恒夫

- 2003（1994）「スポーツ人類学の研究史」『スポーツ文化論』寒川恒夫（編），3-8ページ，東京：杏林書院.

田口貞善（編）

- 2007 『スポーツの百科事典』東京：丸善.

田中秀尚

- 2005 「モータースポーツの社会的意義」『自動車技術』59（9）：71-77ページ.

ドネリー，P.

- 1988 「アメリカにおける眩暈現象—その社会的論評」『スポーツと文化・社会』，ロイ，ジョン・W. Jr.（編），糸野豊（訳），476-487ページ，東京：ベースボールマガジン社.

長崎 正人

- 2008 「世界ラリー選手権開催に伴う自然環境への影響とミティゲーション（2）」第7回「野生生物と交通」研究発表会抄録，2008年2月22日（金）札幌市教育文化会館.

二宮浩彰

- 2009 「日本におけるスポーツ・ツーリズムの諸相：スポーツ・ツーリズム動的モデルの構築」『同志社スポーツ健康科学』，1：9-18.

ハーグリーヴズ，ジョーン

- 1993 『英国民衆スポーツの歴史社会学—スポーツ・権力・文化』佐伯聰夫・阿部生雄（訳），東京：不味堂出版.

バグウェル，フィリップ・S/ピーター・ライス

- 2004 『イギリスの交通—産業革命から民営化まで』梶本元信（訳），東京：大学教育出版.

ハーバーマス，ユルゲン

- 1994 『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』細谷貞雄・山田正行（訳），東京：未来社.

ベッツ，J. R.

- 1988 「技術革命とスポーツの興隆（1850~1900）」『スポーツと文化・社会』，ロイ，ジョン・W. Jr.（編），糸野豊（訳），414-439ページ，東京：ベースボールマガジン社.



ホイジンガ, ヨハン

1963、1973 (1938) 「現代文化における遊びの要素」『ホモ・ルーデンス』高橋英夫 (訳), 426-427ページ, 東京: 中央公論社.

ホール, コリン・マイケル

1996 『イベント観光学——イベントの効果、運営と企画』須田直之 (訳), 東京: 信山社出版.

マッキントッシュ, ピーター・C.

1991 (1987, 1963) 『現代社会とスポーツ』寺島善一・岡尾恵一・森川貞夫 (編訳), 東京: 大修館書店.

マックファーソン, B. D.

1988 「スポーツ社会学研究の過去、現在と将来の展望」『スポーツと文化・社会』ジョン・W. Jr.・ロン (編), 桑野豊 (訳), 17-35ページ, 東京: ベースボールマガジン社.

松村和則 (編)

2006 『メガ・スポーツイベントの社会学——白いスタジアムのある風景』東京: 南窓社.

山口泰雄

2004 『スポーツ・ボランティアへの招待——新しいスポーツ文化の可能性』京都: 世界思想社.

ロイ, ジョン・W. Jr.・ジェラルド・S・ケニヨン, バリー・D・マックファーソン (編)

1988 『スポーツと文化・社会』桑野豊 (訳), 東京: ベースボールマガジン社.

渡辺正

2007 「インダストリー・技術・レギュレーション——モータースポーツを事例に (特集: フェアプレイ・スピリットは死んだ)」『現代スポーツ評論』(16) 94-101.

### 【参考資料】

FIA (Fédération Internationale de Motocyclisme国際自動車連盟)

2010 *Sport Code*, Fédération Internationale de Motocyclisme

MFJ (日本モーターサイクルスポーツ協会)

2010 『FIMスポーツコード規律及び裁定規定』日本モーターサイクルスポーツ連盟 (MFJ) によるFIMの和訳文書.

文部省/スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議 (編)

2000 『スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書』8ページ, 文部省.

- <sup>1</sup> マン島はイギリス諸島の中心に位置するクラウンディペンデンシーの独立自治地域である。独自の議会や立法を持つ。人口約8万人。
- <sup>2</sup> motor sport、motor sportsという表記のしかたもある。
- <sup>3</sup> スポーツ文化の多様性を「するスポーツ」「みるスポーツ」「ささえるスポーツ」ということばで概念を著したのは、スポーツ・ボランティアを研究する山口泰雄が会議委員として実態調査に関わった「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議」（1997-1999）で、『スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書』〔文部省2000：8〕に掲載された。
- <sup>4</sup> 一般的なスポーツとは、ここでは陸上競技や球技、自転車競技、ヨットなどの水上スポーツ、雪上や氷上で行うウィンタースポーツ、人力、風力や水力などの自然エネルギー、馬術や競馬など人間と一体になって行うアニマルスポーツを指し、モータースポーツと障害者スポーツを除く。
- <sup>5</sup> 二宮は「スポーツとツーリズムの領域からみたスポーツ・ツーリズムの範疇」を整理し、モータースポーツを「みるスポーツ」に分類した〔二宮2009：14〕。
- <sup>6</sup> 常設サーキットは広大な土地が必要になること、マシンから発生する音や大人数集まる観客から発生する騒音対策、イベント時の混雑対策などから、全世界的に市街地から離れた立地である場合が多い。ただし、近年は都市部に臨時の公道サーキットを設けるケースも増えつつある。例えば、四輪のフォーミュラ1は2009年からシンガポール、2010年にはスペインのバレンシアでそれぞれ公道サーキットでの開催を行なった。
- <sup>7</sup> 近年日本では例えば、三重県の鈴鹿サーキットや静岡県富士スピードウェイなど。
- <sup>8</sup> 日本自動車連盟。
- <sup>9</sup> カートとは超小型のレーシングカーのことである。
- <sup>10</sup> オートバイによるツーリングやオートバイの改造、集会などを総称して原文では20世紀初頭から使われているMotorcyclingという言葉を使っているが、適当な訳語がないため、ここでは「オートバイによるレジャー活動」と訳した。
- <sup>11</sup> バイカー、モッズとロッカーズ、暴走族についてはAlford and Ferriss [2007] やThe Solomon R. Guggenheim Foundation (ed.) [1998] を参照。
- <sup>12</sup> 自動車工業会2009年度ユーザー調査による。
- <sup>13</sup> 日本語版原文ママ。
- <sup>14</sup> 日本語版原文ママ。
- <sup>15</sup> 「メディア・スポーツ」とは、メディアを通じて観戦が成立するスポーツ、メディアが伝えることで発展・拡大したスポーツ、あるいはメディアを通すことでしか成り立たないスポーツ（例えばエクストリーム・スカイダイビングやフリースタイルクライミングなど）を指すが、スポーツカテゴリーそのものの分類ではなく、スポーツと社会・メディアとの関係性を捉えるための概念である。対義語は「ライブ・スポーツ」とされる〔佐伯1997〕。
- <sup>16</sup> F1とは四輪車のフォーミュラ1を指す。最高峰のテクノロジーと運転技術を競い、興行的にももっとも成功しているモータースポーツである。
- <sup>17</sup> 例えばSimone (2009) や長崎 (2008) など。
- <sup>18</sup> 19世紀末から20世紀初頭のブリテン島における自動車利用者と自動車反対派との確執については『イギリスの交通』〔バクウェルとライス2004：130-154〕に詳しい。
- <sup>19</sup> もっとも、スタジアムで行なわれるサッカーにおいては、フーリガンによるとされる大惨事「ヘイズルの悲劇」（1985）事件などが起こっている。

- <sup>20</sup> 原訳文ママ。
- <sup>21</sup> モータースポーツのことを指している。
- <sup>22</sup> アメリカの人類学者ブランチャード (Blanchard) とチェスカ (Cheska) が1985年に『スポーツ人類学』(*The Anthropology of Sport*) と題した著作を出版したのが最初だという [寒川 1994]。
- <sup>23</sup> originは本来「起源」を表す単語ではあるが、クルマやバイクに「起源」ということばをあてると、その車種が開発されたときのことを指し、適当ではない。ホワイティング論文では、愛好家がコレクションしている所有車にまつわる経歴や由来を語ることが彼らのアイデンティティにつながっていると論じているため、ここでは「由来神話」と訳した。
- <sup>24</sup> TTだけでなく、当時の世界グランプリ選手権シリーズにおいて他のサーキットも含め重大事故が相次いでおり、参加ライダーはFIMにコースの安全性への配慮が足りないとして、世界でもっとも有名なレースTTでボイコットの手段を用いて世論にアピールした事件。
- <sup>25</sup> マッド・サンデーとは、TTウィーク半ばの日曜日に一般の観光客が自分のバイクでTTコースをまるでレースのように走り回る日のこと。レースは宗教上の理由で原則として日曜日には開催されず、またマン島は原則として最高速度規制がないため、自然発生的にマッド・サンデーの習慣が生まれた。
- <sup>26</sup> マン島人が外部の者と言う場合、イギリス、それもブリテン島のイングランド人やウェールズ人を指す場合が多い。
- <sup>27</sup> 当時マン島はすでにクラウンディペンデンシーとして政治的にイギリスから独立していたが、税制など様々な場面で英国議会の影響下にあった。
- <sup>28</sup> ビリグ (Billig) [1995] によると、政治家の演説や新聞などでwe、us、ourが使われるとき、それらの言葉は、ナショナリズムやアイデンティティの平凡で日常的なシンボルとして人びとと共有されるのだという。
- <sup>29</sup> マンクス (Manx) とは、「マン島人」や「マン島の」を表す言葉。

# **A Research Review of Motorsport Studies in Social Science**

## **——Point of view for The Isle of Man TT Races Studies——**

KOBAYASHI, Yuki

key word : Motorsport, The Isle of Man TT Races, Sport Tourism, Sports Volunteer

The purpose of this paper is to review previous studies about motorsports in the social science literature concerning the relationship between local community and the Isle of Man Tourist Trophy or TT races. Because of its characteristic, Motorsports have developed which involve various aspects such as the interrelated influences and, with the development of technology, sport tourism has grown. However, accumulation of studies in the social sciences is not enough. Therefore, I will discuss the first appearance of the word 'motorsports' to address the definition of motorsports. Second, I will examine the positioning of the study of motorsports in the social sciences. Furthermore, I will analyse the trend of motorsports study and examine subjects for further research while surveying a previous study about the TT. As a result, this paper will show that many existing studies are insufficient in “supporting sport”. The future project is the necessity of adopting multiple visions, in particular “supporting sport” for the study of motorsports.